

60分でわかる旧約聖書(14) 「歴代誌第二」

1. はじめに

(1) 書名

- ①サムエル記、列王記、歴代誌は、それぞれ本来は一書である。
- ②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。
- ③それ以降、その習慣が定着した(ヘブル語聖書も同様)。

(2) 著者

- ①恐らくエズラであろう(ユダヤ教の伝統)。
- ②用語や文章のスタイルが、エズラ記とネヘミヤ記に似ている。
- ③歴代誌にはエズラ記とネヘミヤ記も含まれていたと思われる。

(3) 内容

- ①ヘブル語聖書の最後の書である。
- ②歴代誌第一の内容は、サムエル記第一と第二に対応している。
- ③歴代誌第二の内容は、列王記第一と第二に対応している。
- ④列王記は預言者の視点から書かれている。政治的記録。
- ⑤歴代誌は祭司の視点から書かれている。宗教的記録。
- ⑥歴代誌が強調するテーマ

*レビ人、神殿建設、申命記に記された神の契約、聖なる都エルサレム

2. メッセージのアウトライン

- I. ソロモンの治世(1~9章)
- II. 王国の南北分裂(10~12章)
- III. 南王国の崩壊(13~36章)
 1. アサ(14~16章)
 2. ヨシヤパテ(17~20章)
 3. ヨアシュ(23~24章)
 4. ウジヤ(26章)
 5. ヒゼキヤ(29~32章)
 6. ヨシヤ(34~35章)

結論：私たちへの適用

歴代誌を通して、歴史の中に見られる霊的原則について考える。

I. ソロモンの治世(1~9章)

1. 1列1~11章の内容とほぼ同じ。

(1) ソロモンは【主】に信頼してその治世を始めた。

①しかし、徐々に心は【主】から離れて行った。

②外国の妻たちが持ち込んできた偶像を礼拝するようになった。

(2) 【主】が王たちに禁じたこと(申17:14~20)をすべて行った。

①馬や戦車を増やすこと

②多くの外国の妻を持つこと

③金銀を増やすこと

(3) 王国は、物質的には栄えていたが、霊的には崩壊しつつあった。

II. 王国の南北分裂(10~12章)

1. ソロモンの息子レハブアム

(1) 彼には、王国を【主】に立ち帰らせるチャンスが与えられた。

①もし長老たちの助言に従っていたなら、統一王国は継続した。

②しかし彼は、若い友人たちの助言を採用した。

(2) 年長者が知者で、若者が愚かだということではない。

①問題は、レハブアム自身がソロモンの宮廷で育てられたということである。

②彼には、知恵ある助言を聞き分ける力がなかったのである。

2. 【主】からの裁き

(1) 王国の分裂は、ソロモンの罪に対する【主】からの裁きであった。

①南王国の王レハブアムにもその責任はある。

②北王国は10部族、南王国は2部族(ユダ族とベニヤミン族)からなった。

(2) ヤロブアムは、ダンとベテルに金の子牛を安置した(ヤロブアムの道)。

①それ以降、北王国には19人の王が出現した(9王朝)。

②善王はひとりもない(北王国は一度も【主】に立ち帰らなかった)。

③アッシリヤ捕囚になった。

3. 南王国の存続

(1) 単一王朝で、20人の王が出現した。

- ①その内、8人が善王である。
- ②しかし、民の罪は余りにも深かったため、大勢としては崩壊に向かった。

(2) 【主】が南王国を可能な限り守られたのは、ダビデ契約のゆえである。

- ①歴代誌の記録は、南王国を中心に書かれたものである。

Ⅲ. 南王国の崩壊(13～36章)

1. アサ(14～16章)

(1) 初めは良かった。

- ①偶像を取り除き、【主】に立ち返るように民に命じた。

- ②【主】は、10年間の平和を与えた。

- ③その間、町々を要塞化した。

- ④【主】との契約の更新を行った。

「さらに、彼らは、心を尽くし、精神を尽くしてその父祖の神、【主】を求め、だれでもイスラエルの神、【主】に求めようとしない者は、小さな者も大きな者も、男も女も、殺されるという契約を結んだ」(15:12～13)

- ⑤母マアカを王母の地位から退け、彼女がおがむアシェラ像を焼いた。

(2) 終わりは悪かった。

- ①【主】から心が離れた。

- ②神殿の宝物倉から銀と金を取り出し、アラムの王ベン・ハダデに贈った。

- ③預言者ハナニに糾弾されたが、悔い改めなかった。

- ④両足ともに重病にかかったが、【主】に立ち帰らないで、医者を求めた。

(3) 教訓：初めが良くても、終わりも良いとは限らない。

2. ヨシヤパテ(17～20章)

(1) 南王国で最も偉大な王のひとりである。

- ①神を求めた王である。

- ②祭司たちを派遣し、民にモーセの律法を教えた。

- ③しかし彼は、3つの失敗を犯している。

(2) 第1の失敗は、政略結婚によって北王国との和平を求めたことである。

- ①息子のヨラムを、アハブとイゼベルの娘アタルヤと結婚させた。

- ②アタルヤは、バアル礼拝を南王国にもたらすことになる。

- ③政略結婚が偶像礼拝につながるというのは、ソロモンの時と同じである。

④ヨシャパテは、自らの信仰的な立場を妥協させた。

(3) 第2の失敗は、アハブと同盟を結び、北王国の敵と戦ったことである。

①アハブはヨシャパテに、王服を着て戦場に行くように願った。

②【主】はヨシャパテを守り、アハブが殺されるようにされた。

③罪を犯したが、【主】がヨシャパテ守られたという例外的な事例である。

(4) 第3の失敗は、富を得るために、悪王アハズヤと同盟を結んだこと。

①タルシュシュ行きの船団は、嵐に会って難破した。

②これは、今も信仰者が犯しやすい過ちである。

(5) モアブ人とアモン人の連合軍との戦いにおいては、信仰を発揮した。

①彼は、【主】に信頼した。

②祈り、預言、賛美によって勝利した(20章)。

「それから、彼は民と相談し、【主】に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に行って、こう歌うためであった。『【主】に感謝せよ。その恵みはとこしえまで』」

(20:21)

(6) 教訓：礼拝は、クリスチャンの武器である。

3. ヨアシュ(23~24章)

(1) 彼は、奇跡の子である。

①祖母のアタルヤは、ダビデの家系に属する者たちを皆殺しにした。

②大祭司ヨダヤは幼子ヨアシュをかくまい、後に王として擁立した。

③メシアの家系を断ち切ろうとする悪魔の意図が背後にある。

(2) 大祭司ヨダヤの影響

①多くの改革を行った。

②特に、神殿の修復が特記すべき事項である。

(3) 大祭司ヨダヤの死後

①ヨアシュは、レハブアムと同じ過ちを犯し、世俗的助言に耳を傾けた。

②彼は、ヨダヤの息子ゼカリヤを殺した。

(4) 教訓：内に神への愛がないなら、霊的指導者がいなくなった時に墮落する。

4. ウジヤ (26章)

- (1) アザルヤとも呼ばれた。
 - ①長期に渡る繁栄を経験した。

- (2) 彼の失敗は、祭司の役割を果たそうとしたこと。
 - ①傲慢が彼を墮落させた。

「ところが、彼は勢力を増すとともに思い上がって墮落し、自分の神、主に背いた。彼は主の神殿に入り、香の祭壇の上で香をたこうとした」 (26:16)
 - ②彼は、重い皮膚病で打たれた。
 - ②王であり祭司であるのは、キリストだけである。

- (4) 教訓：傲慢になると、自分に委ねられていない権威を行使したくなる。

5. ヒゼキヤ (29～32章)

- (1) 王たちの中で最も霊的な人物である。
 - ①神殿を修復した。
 - ②かつてないほどの規模で、真の礼拝を回復した。
 - ③北王国と南王国がいっしょに過越の祭りを守るように呼びかけた。
 - ④国内から偶像を取り除いた。

- (2) アッシリヤのセナケリブの攻撃を受けた。

「これらの誠実なことが示されて後、アッシリヤの王セナケリブが来て、ユダに入り、城壁のある町々に対して陣を敷いた。そこに攻め入ろうと思ったのである」 (32:1)

 - ①この時、ヒゼキヤはトンネルを掘った。

- (3) 教訓：【主】は、ご自身に忠実な人をさらに試される。

6. ヨシヤ (34～35章)

- (1) ヒゼキヤの息子マナセは、南王国で最悪の王である。
 - ①父ヒゼキヤの業績をすべて破壊した。
 - ②晩年になって、マナセは悔い改め、【主】は彼を赦された。
 - ③マナセの息子アモンも悪王で、2年でその統治が終わった。
 - ④続いて、アモンの息子ヨシヤが王となった。

- (2) ヨシヤは8歳で王となり、16歳で【主】を求め始めた。
 - ①偶像を取り除き、種々の改革を行った。
 - ②神殿修復の際に、律法の本を発見した。
 - ③大規模な過越の祭りを行った。

- (3) 彼の失敗は、自分に関係のない戦いにかかわったことである。
 - ①エジプトの王ネコの進行を食い止められると思った。
 - ②ネコはヨシヤに警告(神のことば)を発したが、それは無視された。
 - ③ヨシヤは変装していたが、戦場で矢に当たり負傷する。
 - ④エルサレムに戻り、そこで死ぬ。

- (4) 教訓: 自信過剰になると、自分に関係のないことに首を突っ込みたくなる。

結論:

1. はじめに

- (1) ヨシヤの死後、弱小の王たちのみが登場する。
- (2) 最後の王はゼデキヤである。
- (3) 前586年、南王国はバビロン捕囚になる。

2. 南王国が滅びた原因は何か

- (1) 民が【主】から離れ、偶像を礼拝するようになったことが原因である。
 - ①最初は、偶像礼拝は秘密裏に行われた。
 - *神殿では【主】を礼拝しながら、同時に偶像も礼拝した。
 - ②次に、堂々と【主】を離れ、敵の神々をおがむようになった。

- (2) 善王がもたらした好影響は、長続きしなかった。
 - ①善王がもたらす改革は、外面の改革である。
 - ②内面が変化しない限り、真の霊的再生にはつながらない。

3. 私たちへの適用

- (1) 私たちの成功は、【主】から来るものか、この世との協力から来るものか。
- (2) どのような基準で、クリスチャンとしての成功を判断するのか。
「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう」(7:14)